

古文書公開学習講座

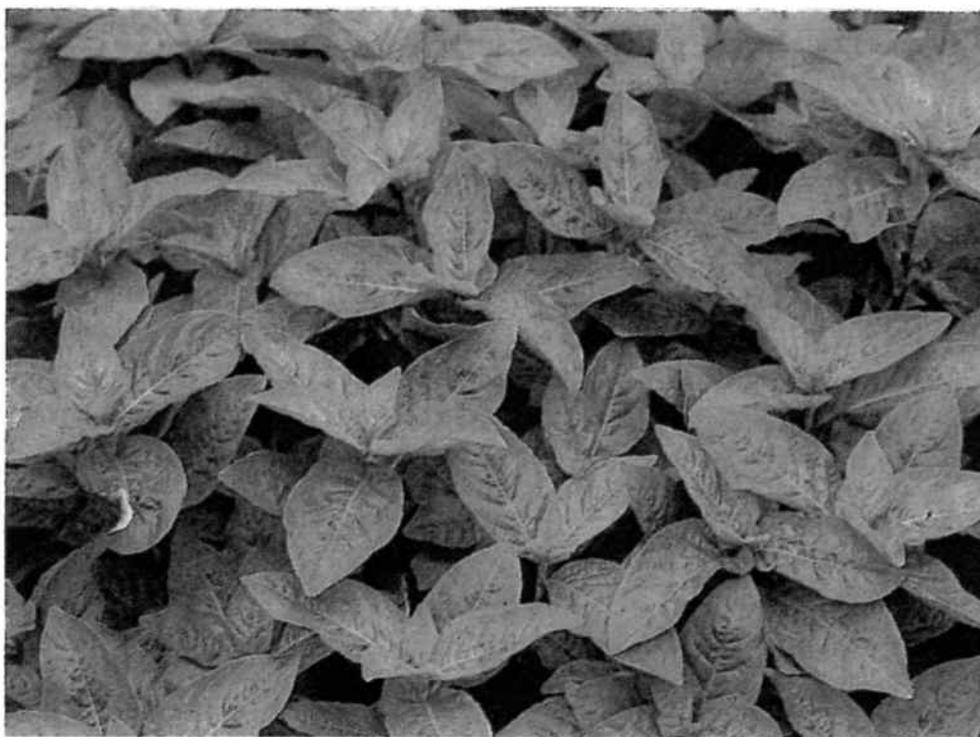
令和元年度

第3回 8月27日(火) 午後1時～

中央公民館

## 山辺地方の藍作

—— かつては山辺地方物産の主位を占めたやまべ藍の盛衰 ——



蓼  
藍

(写真 吉岡幸雄監修「日本の藍」ジャパン・ブルー より)

発表者 松本古文書研究会 宮坂 昌憲

主催 松本古文書研究会

後援 松本市教育委員会

# 山辺地方の藍作

宮坂昌憲

——かつては山辺地方物産の主位を占めた「やまへ藍」の盛衰——

## 1. はじめに ———— 藍について知っておきたいこと ————

### (1) 「藍」とは

藍は、藍色（青色）の色素（インディゴ）を含む染料、またそれをうみだす植物の総称である。藍色（青色）の色素を持つ植物は、マメ科、アブラナ科、タデ科など世界中に100種以上存在するが、よく知られているのは、ウオード、（大青）、インド藍、<sup>たそ</sup>蓼藍である。

#### ○ウオード

ヨーロッパで古くから藍染めに用いられたアブラナ科の植物（二年草）。中世には一大産業となった。

#### ○インド藍（木藍）

マメ科の多年草（小かん木）で、色素成分が多く（純度はウオードの約30倍）、鮮やかな青を容易に染めることができる。大航海時代以降ヨーロッパに伝わりウオードに代わり盛んに用いられるようになった。

#### ○蓼藍

タデ科の一年草。日本の伝統的な藍染めは、この「蓼藍」を用いたもの。インドシナ原産で、中国を経由して日本に伝来した。

### (2) 日本における藍の歴史

六世紀以前に中国から朝鮮半島を経て伝来。法隆寺や正倉院には藍染めの布類が多数保存されている。

近世になり、木綿の普及とともに、庶民の暮らしに藍染めが深く浸透し、全国で盛んに藍が栽培された。江戸時代には、阿波の国（現在の徳島県）が最大の生産地であった。

明治後期、インド藍や、合成染料が登場し、国内生産量が激減した。

第二次世界大戦中、藍は栽培禁止の作物となったが、終戦後はすぐに栽培が再開され、現在も国内の需要を満たすため栽培されているところがある。

### (3) 藍の栽培とすくも藍づくり ———— 徳島県阿波地方の例 ————

3月上旬一番ツバメが訪れる頃、種を蒔く。5月上旬には、20cmくらいに成長する。

6月下旬から夏にかけては、梅雨明けにまず1番刈りを収穫、さらにぐんぐん成長させて、2番刈りを行なう。収穫したらその日のうちに茎葉を約2cmに切る。乾燥させて大型の扇風機で飛ばして葉と茎に分別。袋につめて保管する。

9月、藍を寝床に出し、すくも作りがはじまる。藍を床に寝かせ、4、5日ごと水を打ち、上下切り返しを繰り返す、むらなく醗酵させる。このような作業が12月初旬まで100日ほど続く。仕上がったすくもはかますに入れて、全国の染師に送られる。

すくもを丸く搦き固めたものが藍玉で、かつては流通に便利だったため主流だ

つたが、すくもの状態で流通できるようになり、しだいに作られなくなった。

#### (4) 藍染め

##### ○ 藍建て

藍はもともと水に溶けない。この水に溶けない藍を溶かすことで染め液をつくることを藍を「建てる」という。

##### ○ 藍染めの原理

藍植物に含まれる水溶性で無色のインディカンを加水分解することでインドキシルとグルコースができ、空気に触れて酸化してインディゴが生まれる。沈着と酸化発色の工程を何度も繰り返して染色する。発色回数の違いで藍色の濃淡が表現される。

##### ○ 藍建ての方法

日本の伝統的な藍染めでは、土の中に埋め込んだカメ(瓶)の中に、すくも・小麦ふすま(発酵の栄養源)・灰汁(アルカリ)・をいれ一週間ほど発酵させ、不溶性のインディゴを還元して水溶性にする。

## 2. 山家組での藍作

松本地方で、藍をいつ頃から作つたかについては明確には知り得ない(東筑摩群・松本市・塩尻市誌)。

### ○ 山家組の藍

山家組にひろく生産された藍は、一九世紀にはいると藍生産を主体とする経営農家が出現し、しだいに生産量が増大した。おそらく文化期と推定されるが「藍作方仕法書」(資料1)が在方にでまわり、多くの農民が書き留めている。(中略)栽培から加工まで手間のかかる作業がつづいたため、栽培農家ではその生産と加工を専業としなければならなかった。ほかの農業耕作を中断しなければならなかったため、靱の現物年貢での納入を中止し、金納にしてほしいとする願書(資料2)がだされている。藍の生産と加工は、山家組村々の経済構造を大きく変化させるものとなった。(松本市史)

### 資料 1

#### 藍作方仕法書

##### 藍植附之事

一 藍は三草の一品にして、是を作りて益多き事は普く諸人の知所也、御領分村々幸ひに風土にもかなひ、近來追々と増長して村為に相成といへども、作り方と苅取節の巧拙に依て其能もまた遙に違ふ事ゆへ、作り方の大躰を左に記しぬ。かならず如斯可致とにはあらず、其村々仕なれ候作り方取交して、其宜可究との事也。

##### 藍苗場并うつし植る事

一 藍苗は秋すぎ頃に地を深くおこし置候中に下ごいを強くして置、春種を蒔まへ四五日種を水に入置、能かわかして蒔き、砂を懸其上に藁を薄く置、出生後は右のわらを取、若かわきて飛虫出来候節は、薄き弧を夕方にきせ置、翌朝日の出まへにくるくると巻取、外へ持出こもを拂ひ、何日も如斯すれば飛むし絶る事は必定なり。

一 苗場よりうつし植る事は、藍苗五六寸のび早朝に苗場へ水をそそぎ置、晝まへにこぎ取、其からのあくを出し置、根を暫くひたし植候得は、苗の虫失せる也。畑はうねをもり置、三四本づつならべ根に缺にて土を少しかけ植る也。苗多分にては悪し。翌日薄こひをかける。根に土を度々寄せるがよし。こやしも始の内は薄こひ後は強きがよし。

#### こやしの事

一 肥は第一ほしか下肥・小便・馬屋こひ・土こひ・油かす・こぬか・大豆の類をよしとす。

御附紙、こやしは藍苜取五日程まへまでは度々いたすがよし、苜取節までこやしの間有之節は、紅ぬけるとなり、但しほしかは御領内にては求めがたき故、町方着問屋本町吉衛門、中町儀七申達置候間、是等へ懸合候得は多少に限らず越後より取寄せ遣す筈に候得ば、望之ものは右之者へ可申談、価は相対次第の事也。

一 大豆の遣ひよふは、豆を一兩日水へ入置、豆腐をする如くひき溜へくれ水を入置、此挽立を入一兩日過てかける也、おぐれては利き悪し。

一 油かす・米糠等等分にまぜて晴天に根に撮み置也、是は葉を厚くし紅をのせるこやし也。

一 土肥は随分性よき土を撰み暑中に七度程も下肥をかけ、よくほし置藍植付て根につまみ置なり。

#### 虫を去る事

一 ずい虫は小便より出来る、折々取より外に仕様なし。

一 あぶら虫は始少の時、其からかあるひは切こみをせんじ出し、葉ほうきにてぬり付けてよし、場広なれば青草をうねへ苜込候得ば、ゑん天に草干上る悪気にて虫失せる也、後くされてはこやしとも成由也。

一 のげさ虫は麥からより出来る、折々中を切るよし、馬屋こひに麥からを入、夫を畑へ出候得ば、此虫生候間馬屋こひは必ず用べからず。

#### 藍苜取よふの事

一 葉藍こなし様は、土用明より其年の様子を計ひ四葉かけ位に切て干す也。苜しまふ迄に日数多くかかれれば、花出候ゆへに紅ぬけ目方もへり染り方も悪しきによつて直段格別に違ふ由也。成丈け日数のかからぬよふ苜おさむべし、数日の功を空ふすべからず。

一 粉藍こなし様は畑一枚の内に花二三本も見へ候位の時、天気を見定め晴天に朝露のまま苜込干て二つ切にして翌日ねこの上にて亦干てうつ也。干候節雨に当たりては大に悪し、夜露さへ度々は宜からず。但し藍の苜おさめよふは此仕法に留る也。永く所の産物たらんには、時の小利にまどわず売先々の悪と思ふ事は本元にてはぶき其物宜き時は仲買あるひは紺屋にても自直段より買取事ゆへ相統して村益たらん事必せり。

一 藍干場は土砂の上よし河原杯にて俄干は目方も切れ染色も悪しき由也。右の通及聞候大体を記といへども猶及ばぬ所は是に加へて出精致すべし。売買の時も売人買人利を奪ひ合不正之事なく、相当を第一に可致事なり、格別不増之族も有之候は、直段方国産会所江可申出、其訳に寄詮義におよび可申、其年柄によつて売余り格別難渋之者は、是又右両所江申出候はば、其筋によつては訳の付かたも可有之哉に付、一通り申達置候。

子十月

直段方

国産方

(下波田 百瀬大仁文書)

(東筑摩郡・松本市・塩尻市誌)







北尾車致預り之覚

當祖為念村赤松寺山内住持長年自甲寅

忘却財方山收元在牛後之右法家方おのて

蓋可致交仕有月是爾法家より一宗百抱前承

中者當為右村將之是ゆり者後一山使中承りて村

社後承者も是元定本宗より非承り中掛減察

入事速辨因及る東在室屋家方は世戦右村の及

以月通より右法保掛合仕有因今中承りて

此度中承り後者全心得承りて少可責めせ給

可後右村中承り後承りて非承りて承りて承り

承りて承りて承りて承りて承りて承りて承り

右承りて承りて承りて承りて承りて承りて承り

承りて承りて承りて承りて承りて承りて承り  
承りて承りて承りて承りて承りて承りて承り  
承りて承りて承りて承りて承りて承りて承り  
承りて承りて承りて承りて承りて承りて承り

承りて承りて承りて承りて承りて承りて承り  
承りて承りて承りて承りて承りて承りて承り  
承りて承りて承りて承りて承りて承りて承り  
承りて承りて承りて承りて承りて承りて承り

承りて承りて承りて承りて承りて承りて承り  
承りて承りて承りて承りて承りて承りて承り  
承りて承りて承りて承りて承りて承りて承り  
承りて承りて承りて承りて承りて承りて承り

3. 絞り染め

明和年間に絞り染めが山家組でさかんになったことを伝える享和四年(一八〇四)の記録がある。(桐原文書、金井圃『近世大名領の研究』所収)(資料6) 藍を必要とする絞り染めは綿布の一部を糸でくくり、それを藍汁につけてこんで花柄の紋様を染色する技法である。安永四年(一七七五)山家組橋倉村(入山辺)の絞り染の商売をはじめ願書(官坂昌憲家文書)(資料7)、島立町村(島立)の文化九年(一八一二)の藍桶二本で絞り染めと糸染めの一色願い(村山八太郎家文書)などがある。(松本市史)

資料6

乍恐奉願口上之覺

一、絞染之儀者、明和年中当組(山家組)二而仕出シ、連々発向仕、諸方江相開キ、組方一統申合、作間稼として絞染御運上御願申上、藍桶沓本二付銀六匁つつ年々御上納仕度、御許容奉願上候所、御聞濟被下置、一統難有出情(精)仕、諸方江相開キ〔付紙略ス〕、永久之利益広大之儀と奉存候、猶又、近年別而諸組并町方迄、当組之仕法ヲ見習、絞染多分二相成、近国ハ勿論、遠国迄、莫大之売捌方宜敷土地二おゐてハ絞紺屋ハ勿論、不用二遊候女子迄もくゝり稼仕、其外木綿晒稼之者并御百姓方藍作仕、売捌宜敷、夫々稼道相開キ、助成不過之と奉存候、斯奉申上候通、諸方江流行ニ随ひ、町方店々申合、手際染御吟味いたし、染代至而下直二仕、漸年内仕舞之惣辻二而、誠ニ少々之手間代相残候而已ニ御座候へ共、右奉申上候通、夫々土地益能成候故、相勵出精仕候所、此度紺屋改衆為不時改と、絞紺屋軒別ニ桶數相改被申渡候者、相改候通、桶數相増、御運上差上可申旨、情々被申聞、承知之者ハ受印可致、不承知之者ハ不承知之一札可出、兩様共ニ、御役所様江可申段、嚴敷被申渡、其段承知仕候、猶又、先年御運上御免許已来と相違仕、是迄染来候加勢染其外、種々手掛絞、ふのり等相用候絞り、不相成旨申渡、何共当惑ニ奉存候、

然ル処、此度紺屋改衆ニ罷申候而者、時々流行之絞り被相止候而者、已来絞紺屋難行立、欲(嘆)ケ敷存奉候、ふのり之儀ハ口口へ持候、其ふのり遣ひ、手掛絞等差止、紺屋株九拾六軒二而可染巧ミと奉存候、左候得者、絞り紺屋之者共ハ不及申、藍作仕、売捌方悪敷、其外一統之難渋ニ相成、御当地不益ニ可相成と奉存候、

乍恐御堅察被成下置、前書申上候通、以御慈悲被為仰付被下置候ハ、一統之御救と重々難有奉存候、此段幾重ニも願之通被仰付被下置候様、奉願上候、以上  
〔日付・差出書・充所闕ク〕  
(入山辺 桐原文書 金井圃『近世大名領の研究』所収)

女性が作間稼ぎに従事する傾向は、諸産業が農村で隆盛になるにしたがい拡大していった。(中略) 山家組湯原村では絞り染めをおこなう女性が四一人いた。これは、家族のうち母と女子のほとんどが仕事をしてきたことになる。

(松本市史)

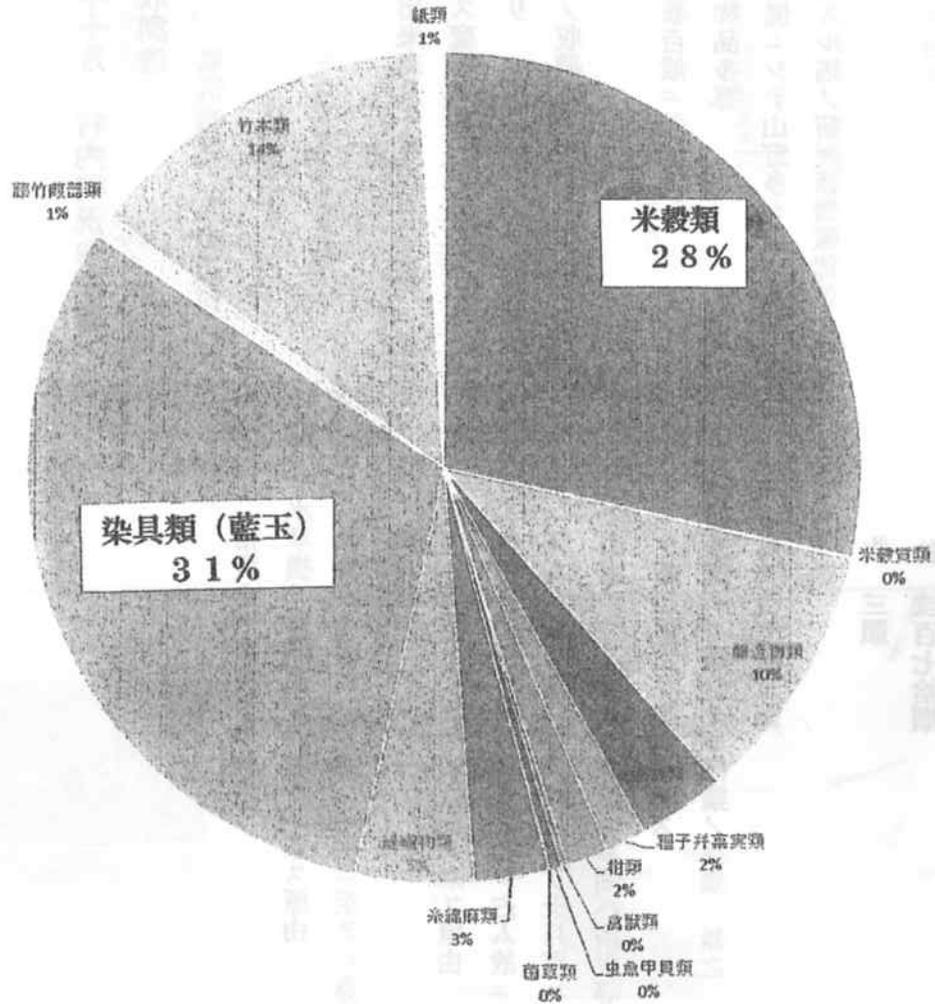




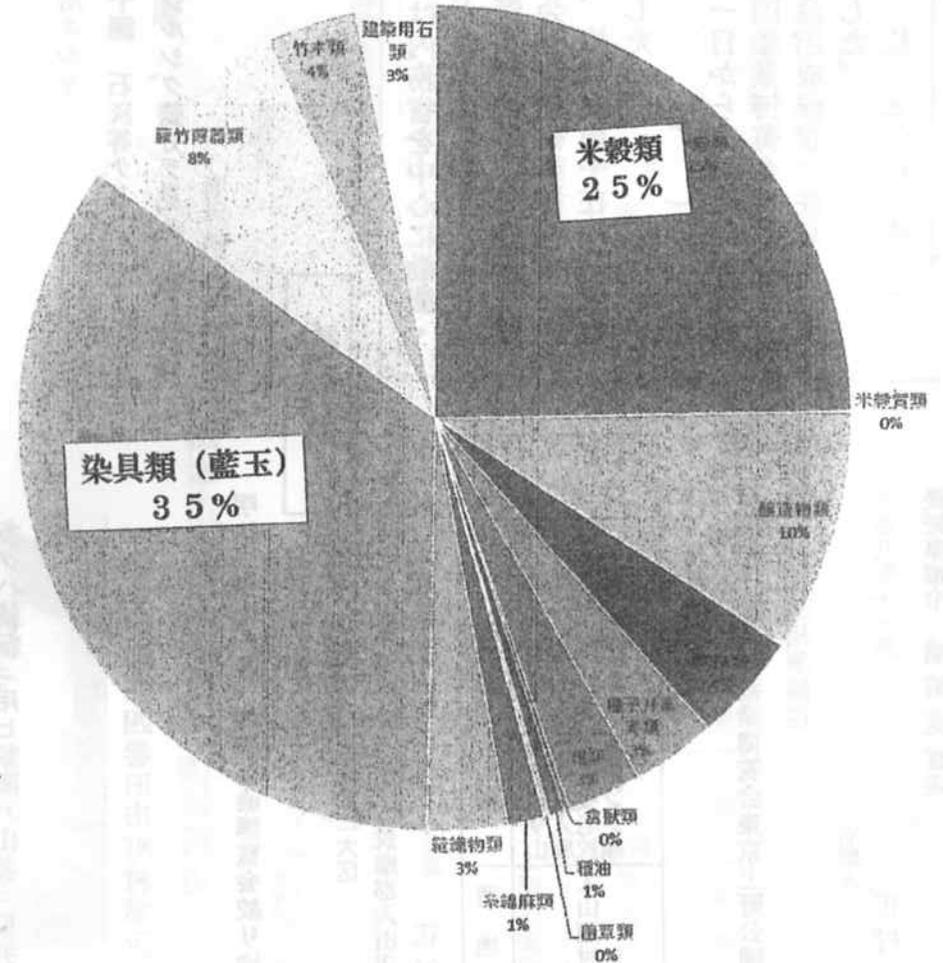
# 明治初期の物産書にみる山辺地区の生産品とその収益

資料 7

明治9年 村物産取調書 入山辺村



明治9年 村物産取調書 里山辺村



松本市史第四巻旧市町村編Ⅳを基に作成

資料 8

明治十二年十月 村内概況取調書

〔表紙〕 村内概況取調書

東筑摩郡 入山辺村

一物産

藍玉其質美色ナリ出来高凡千駄遠近及他邦ニ輸出ス、年々歳々随テ増加ス産物ノ其一ニシテ盛ナリ

木綿絞染摺紙等ナリ

其中藍玉ハ一ヶ年ノ收穫凡金壹万五千円ニ及ベリ

一農業

盛衰ナシト雖モ農事百般ニ勉勵ス

一山業ノ有無及産出ノ物品多寡

当村ノ如キハ耕地僅ニシテ山野多シ故ニ農間ニ皆山業ニ従事ス、産出スル処ノ薪炭葦藁蕨茸等ナリ多ク

他業ク

一耕耘ニ牛馬ヲ用ユルヤ否ヤ

牛馬ノ便ヲ用ユ

一耕地培養ハ多ク何々ヲ用ユルヤ

人糞 木葉 干糠 干鰯 石灰等ナリ

干糠 干鰯ノ類ハ著シルシク養分ヲ見ルト雖モ其価

○ 博覧会への出品

資料 9

明治九年十一月 内国勸業博覧会絞り染村民出品願

自費出品願

南第二大区

筑摩郡入山辺村

花村紋蔵

本館百五十四号

物名	概数	概尺量	製	産地	凡原価
絞り染	五反	丈二丈八尺五寸 巾九寸五歩	木綿絞リ山 繭筋糸入雁 金紋養老紋 ラセンノ類 他	入山辺村	金九円但老 反価金壹円 五十銭以上 弍円以下

凡原価金九円

右ハ来明治十年内国勸業博覧会東京上野公園内ニライテ御開設ニ付出品相願候也

明治九年十一月

右願人

花村紋蔵

長野県権令 檜崎寛直殿

明治初期、政府は内務省を中心に勸農・牧畜・農産加工など各方面にわたって、民業の保護勸奨政策をすすめる。それをうけた筑摩県は、共進会開催や勸業博覧会への出品勸奨をおこない、情報交換や在来農業の見なおしをうながした。

明治十四年三月一日から東京上野で開催された第二回の内国勸業博覧会では、「一村

四、五点ハ必ず出品相成候様」注意し、出品を積極的に奨励した。

(松本市史)

明治九年十一月 内国勸業博覧会藍村民出品願  
自費出品願

南第二大区  
筑摩郡里山辺村  
製造人 赤沢治三

物名	概数	概尺量	製	産地	凡原価
藍 製藍色見手本 葉藍箱入一ツ	二枚	百目	生立ノ儘 日干シ	里山辺村	金拾銭

右ハ来明治十年内国勸業博覧会東京上野公園内ニライテ  
御開設ニ付出品相願候也

明治九年十一月  
長野県権令 檜崎寛直殿  
右願人 赤沢治三

南第二大区  
筑摩郡里山辺村  
製造人 西村仲吾

物名	概数	概尺量	製	産地	凡原価
藍 製造色見手本 葉藍箱入一ツ	三枚	百目	生立ノ儘 日干シ	里山辺村	金拾銭

右ハ来明治十年内国勸業博覧会東京上野公園内ニライテ  
御開設ニ付出品相願候也

明治九年十一月  
長野県権令 檜崎寛直殿  
右願人 西村仲吾  
〔明治十年 内国博覧会ニ開スル部 十一冊ノ内一農産部〕  
長野市 長野県庁所蔵

〔松本市史第四卷旧市町村篇IV〕

資料 11

第三回内国勸業博覧会褒状

藍玉

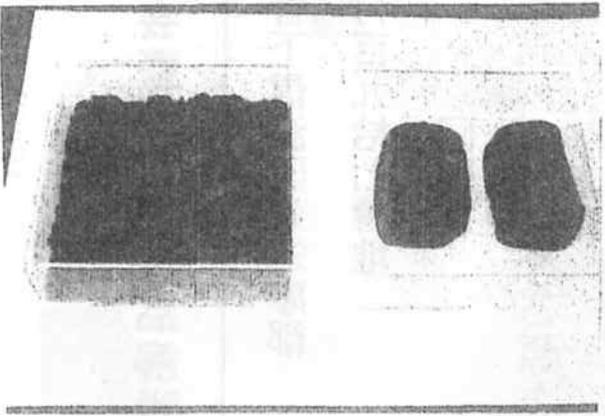
丸山祐弘氏蔵

松平忠太郎  
岸 三郎  
古在由直  
北垣 保隆

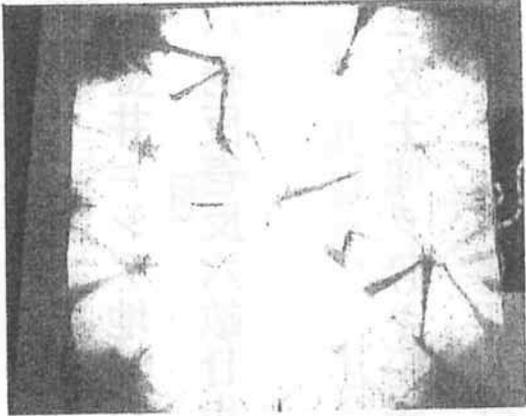
前記ノ薦告ヲ領シ茲ニ之ヲ授與ス

總裁勳位自愛親王

第三回内国勸業博覧会褒状 (藍玉) 明治23年7月11日  
里山辺北小松 丸山祐弘氏蔵



すくもと藍玉



絞り染めの布

旧山辺学校校舎展示より

明治二十三年 内国勸業博覧会藍玉村民出品解説書

号一	物
藍玉	
言方	
出 品 人 名	
長野県管下信濃国東筑摩郡 里山辺村百九拾七番地 □□農 金井右源次 <sup>印</sup>	

産地土質及段別

長野県管下東筑摩郡里山辺村字上金井ニシテ地味ハ乾燥肥沃ナル事本郡ニ冠タリ反別ハ<sup>(市)</sup>壹反六畝廿歩也  
蒔植并採取

前年ノ冬季鋤起シ翌春三月ノ季ニ及土塊ヲ碎キ粉末ニ<sup>(幅以下同シ)</sup>シ巾三尺長式間位ニ整地シ是ヲ苗床トス、壹坪ニ付凡種壹合ヲ度トシ播種ス、五月ノ季ニ至リ五六寸位ニ長スルニ及ヒ凡拾二三本ヲ一株トシ予メ畝立ノ田甫ニ移植ス、八月中旬ニ至リ二三茎ノ花<sup>(方言トビ)</sup>見エルヲ期トシ刈取り太陽ニ曝シ反覆スル事二日間繩ニテ編ミ屋担ニ掛クル者之レヲ一番トス、其残株ヨリ発芽シ九月ニ至リ刈取ルモノ之レヲ二番ト称シ齊シク乾燥スルモノトス

培養并施糞 (略)

製造并貯蓄

編ミタル葉藍ノ充分乾燥セルヲ待テ莖ヲ抜キ葉ノミト  
ナシ凡千八百貫目位ヲ一製造トス、之ヲ床上ニ堆積シ

(床ハ倉庫内ノ土間ニ藁ヲ布キ  
方言ネコ(厚藁)ナリヲ敷ク之ヲ床トナス) 最初ハ多量ノ

水ヲ注キ操返シ置キ発熱スルニ及ヒ又水ヲ灌キ毎日或  
ハ隔日ニ転覆スル事百有余日ニシテ其景状殆ト鉛銷ノ  
如クナルヲ期トシ石臼或ハ木臼高サ二尺五寸直径二尺  
木製ノ杵ヲ以テ搗テ玉トナス、一個ノ重量五百目乃至  
六百目、六拾玉ヲ以テ壹駄トナス

効用 (略)

産出高製造及販売高總計

明治二十二年度産出製造高五拾五駄 此貫數千九百八

拾貫目、此販売高千貳百八拾六円ナリ

褒賞

明治十四年十月長野県第二回共進会へ出品五等賞下賜

セラル

審査請求ノ主眼 (略)

〔明治二十三年分 第三回勸業博覧会出品解説書 農事係〕

長野市 長野県庁所蔵

(松本市史第四卷旧市町村篇Ⅳ)



藍 白

旧山辺学校展示





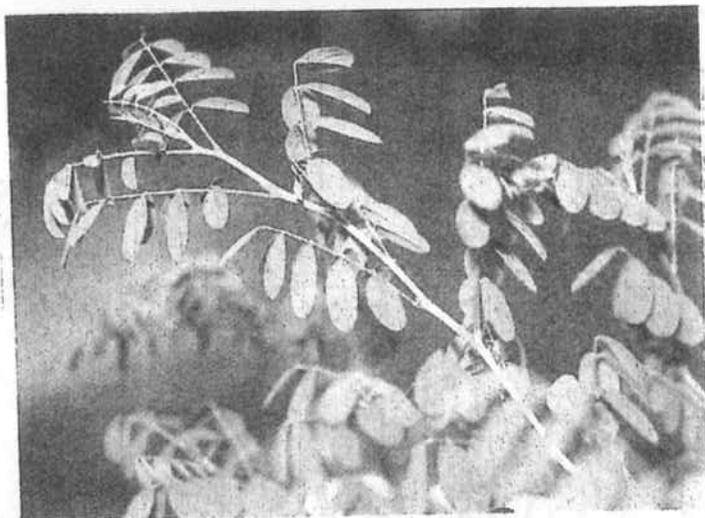
明治前期における特用作物栽培面積の推移は、第三〇六表のようであつて桑を除くすべての作物は衰退の過程をたどり、養蚕が副業から主業へとその位置をかえて隆盛となるにおよんで、桑以外の特用作物はほとんどかえりみられなくなつた。

第三〇六表 明治前期における特用作物作付面積の推移 (単位町) 農務省統計書

	藍	菜種	烟草	蘭
明治18	93.5	408.0	345.0	
19	93.1	352.5	254.7	
20	88.5	371.3	367.2	
21	95.9	374.3	277.7	
22	66.2	248.0	438.1	15.1
23	37.8	263.3	293.8	15.5
24	15.7	463.9	301.7	22.0
25	15.9	272.6	379.4	19.6
26	18.5	252.5	215.3	19.0
27	5.1	141.1	203.1	
28	4.9	141.6	304.1	
29	1.4	151.1	432.1	
30	2.1	145.8	370.9	

明治一九〇二一年を劃期とする印度藍輸入額の激増ならびに人造染料特にアリザリン染料による染色技術の進歩は、日を追つて天然藍の領域をおかし、わが国の藍作は明治三〇年を頂点として衰退したが、当地方の藍作は同二、三、四年を境として作付面積が激減しており、いち早く桑園への転換をとげている。同三〇年における生産量は県下全体のわずか三パーセントに過ぎなかつた。

(東筑摩郡松本市塩尻市誌)



インド藍

### 人造藍 (合成藍)

石炭から石炭ガスを取り、ガス灯が普及した19世紀末、その残渣であるコールタールを利用できないかと化学者が模索していた中、1856年にパーキンが、初めて合成染料、モーブを合成した。それに引き続き、ドイツ人のバイヤー(Von Bayer)が、1880年インジゴを合成することに成功し、1883年その化学構造を確定した。これが、発端となつて1887年ドイツにおいて初めて工業的生産に成功し、1897年にはBASF (バディッシュシュアリンソーダ工業会社) によつて量産化がはじつた。

合成インジゴは、天然インジゴと全く同じ物質であり、純度の高く一定のものが安価に生産できたことから、天然のものを衰退させてしまった。

### 内国勸業博覧会

明治政府の殖産興業の政策の一つとして開かれた内国物産、美術・工芸品の博覧会。1877年(明治10)、1881年(明治14)、1890年(明治23)東京上野公園、1895年(明治28)京都、1903年(明治36)大阪で開催。農産物、工芸品、機械類等を出品。回を重ねるごとに盛んになり共進会とともに産業技術の発達を促した。内国と付くのは、第一回内国博を主導した大久保利通の意向による。これは内国物産の開発・奨励を第一義の目的としているという意味もあるが、外国人の治外法権と内地通商権の不許可という事情にもよる。

### 山辺地方の各地に残る藍倉



入山辺橋倉 宮坂啓二氏所有



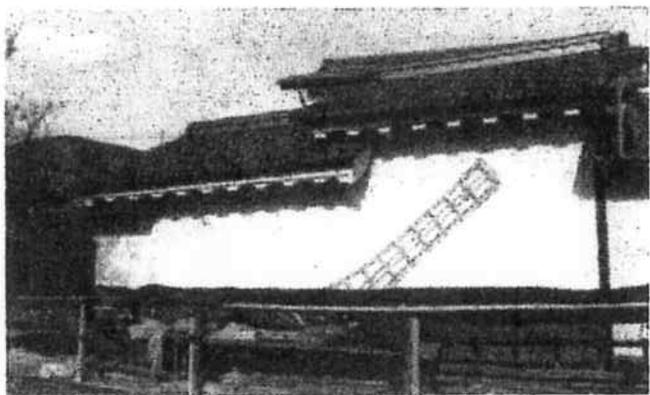
里山辺上金井 故矢崎勢一氏所有



里山辺林 柳澤靖夫氏所有



里山辺兎川寺 山本甚一氏所有



里山辺下金井 上地端氏所有